JICA国際研修フォローアップに参加して
—「共創knowlege Co-Creation」について考える—

結核予防会結核研究所
国際協力・結核国際情報センター長　山田 紀男

これまで本誌でも特集が組まれたように，結核研究所におけるJICA結核対策国際研修は50年以上にわたって実施されてきました。国際研修の評価を行い研修の改善に生かすことを目的に，2017年1月，タイとカンボジアのJICA研修修了者のフォローアップが実施されました。本事業はJICA東京国際センターの人間開発課長坂元氏と常間地氏が担当され，研究所から山田，大角，松本が同行しました。両国で結核対策・公衆衛生の現場で活躍する研修修了生に面接し，各人にとって研修に参加したことがどのような影響があったのかを知る機会となりました。

両国ともに結核対策課長は研修修了生ですが，タイ国の結核対策課長のお話が特に印象的でした。彼女は研修参加前は結核対策に将来も従事するとは考えてはいませんでしたが，研修に参加して今後も結核対策にかかわろうという気持ちに変わり，「研修は人生の進路を変えることになった」ということでした。カンボジア国でも「研修は，臨床医であった自分を結核対策担当者に変えた」というようなことを聞きました。このような研修の結果を聞くことは，世界の結核対策への日本の貢献を実感し，研修実施機関としてうれしいことでした。そして，この研修の特徴を改めて考える機会ともなりました。

最新の結核対策の知識技術について短期間で伝達するだけの研修では，このような長期的な効果は得られなかったと思われます。疫学や問題発見・解決方法など公衆衛生一般に活用できる知識・技術の習得は国際研修で伝統的に重視してきた内容で，検査技師コースにおいても実技だけでなくマネージメント習得を重視しており，これらは時代や担当業務が変わっても有用な知識・技術と考えられます。さらに，研修から得られるものの中には，知識・技術を超えた何かもあるように思われました。

JICAでは「共創knowlege Co-Creation」ということを重視されています。この研修においては，講師から研修生へ伝達するということだけではなく，問題解決に向けた共同作業といえると思います。この研修では参加者がお互いの経験を分かち合い，自分の担当地域の問題解決に生かすという参加型の研修を重視してきました。また，この研修に研修生として参加した経験や国際協力の現場経験がある研究所職員が研修を担当してきたことも，研修参加者と共に研修を作り上げていくということにつながっていると考えられます。研修実施に際しては，研修開始初期よりWHO西太平洋地域事務所が協力し，その後も米国CDCなどの国際的パートナーの協力を得て内容の充実を図ってきました。このように様々な形の共創，協力があり，それが効果的な研修につながっていると考えられます。

さらに，研修参加者は教室の中だけでなく，日本滞在中に出会った日本人の仕事や日常生活における姿勢（規律，勤労意欲，公共性といった価値観）というものからも感じるものも多かったようです。これについては，各地で協力を得て実施しております視察研修が重要な役割をもっていると思われます。結核終息戦略（End TB Strategy）時代では，結核を年10%減少させた日本の経験を学ぶ重要性がこれまで以上に増しておりますので，今後ともご協力をお願いいたします。

研修修了生でタイ国保健省副次官のソムサック氏（左から7人目）を囲んで
（左より6人目　坂元氏，右より2人目　常間地氏，左より5人目　筆者）
写真提供：JICA東京国際センター